

# 「支援システム」による授業づくり

## —子どもの学習を支援する新しい授業づくりの誘い—

わが国的小学校におきましては、平成4年度からの新学習指導要領（教育目標）と新指導要録（教育評価）の完全実施に伴いまして、いわゆる「新しい学力観」に基づいた授業の実践が緊急課題として求められました。

くしくも私たちは、平成4年度から「主体的に対応しつづける子どもを育てる学習指導」という研究主題を掲げ、新しい授業づくりの実践に取り組んでまいりました。子どもが自己の学習体験を旺盛にして主体的に対応しつづける資質・能力を高めていくうとするための新しい授業の姿を求めてまいりました。さらに、平成5年6月に開催いたしました研究発表会後には、テーマを「主体的に対応しつづける子どもを育てる教育活動」というように広め、これまでになかったような、さらなる斬新で、ユニークな学習指導や評価の実践を行ってまいりました。

すなわち、子ども一人一人が持っている資質・能力を十分に発揮し、学習対象との関わりを独自に深めさせることによって自己のよさや可能性を伸ばし、それぞれの子どもが自己実現を図ることができるような学習を教師が側面から支援するという授業のあり方を模索してまいりました。具体的には、まず子どもの理解を図り、それに基づいて教える内容やその形態、方法を多様に用意し、子どもたちにそれらの中から自由に選択させるという方法を実践しました。そして、子どもたちはそれらの用意された学習環境の中から自分の最も好きな、あるいは最も得意とする学習の仕方を選択し、それに基づいて学習を展開するという授業を実践いたしました。このような授業を私たちは、支援システムによる授業（従来の学習指導からの脱却を目指して）と名づけました。このような支援を基盤とした授業によって、子どもの学ぶ意欲を重視し、それに基づいて思考力・判断力・表現力の育成を試みてまいりました。

このような、子どもの学習活動を側面から支援するというかたちの授業を実践してきた背景には、もともと学習というのは、本来子ども自身が学習する内容や形態、方法を選んで行うものであるという基本的な考え方には依拠しているからであります。そして、子どもたちは、自分の力でそのよさや可能性を伸長していくことが重要であるという発想を大事にいたしました。これまでにってきた実践でどれほどのことが提案できるかについてはまだ定かではありませんが、これまで実践してきた結果では、このような支援による授業づくりはかなり前途有望な在り方ではないかという確信を抱いております。これまでの実践を一応まとめてみましたものが本著であります。

なお、本著は本校の研究同人のみの実践によって行われたものではありません。この書物が刊行されるまでには実に多くの方々の激励や支援があったことを申し添えておかなければなりません。全体講師の小泉先生には、これまで熱心なご指導を賜ったばかりではなく、研究の基調となる論考をお寄せいただきました。また、その他の大学の指導教官の先生方のご支援はもちろんのこと、本校の先輩の諸先生方のご支援もまた並々ならぬものでした。そして、このような研究が陽の目を見ることができましたのは、明治図書出版編集部の、江部満氏と樋口雅子氏、このお二人の心温まるご配慮があったからにはほかなりません。

このような多くの方々のご支援により本著が出版できますことに心から深い感謝の意を表します。

平成6年3月  
福岡教育大学附属久留米小学校  
校長 井上 正明